

41. 獨協医科大学皮膚科におけるサルコイドーシス症例の検討

—皮膚病変を伴う症例の集計—

皮膚科学

石川里子, 濱崎洋一郎, 北村洋平, 林周次郎
嶋岡弥生, 小関邦彦, 簗持 淳

【目的】サルコイドーシスは原因不明の全身性肉芽腫性疾患である。我々は皮膚病変を伴うサルコイドーシス症例の臨床的特徴, 治療経過を明らかにするため集計, 解析した。

方法: 1990年から2010年までに当教室で病理学的に診断された60症例について性別, 年齢, 合併症, 皮疹の病型, 臓器病変, 検査所見, 治療経過などの項目を解析した。

【結果】①60症例の男女比は1:2.75であり, 年齢は20歳台と40, 50歳台に多かった。②合併症は糖尿病11例, 肝炎5例, 高血圧3例, シェーグレン症候群3例, 内臓悪性腫瘍3例(子宮癌, 大腸癌, 肺癌)であった。糖尿病合併例は皮膚サルコイド結節型, 皮下型に多かった。③検査所見ではツ反陰性72.5%, ACE高値53.3%, リゾチーム高値46.5%, IgG, IgA, IgMいずれかの上昇70.6%, 可溶性IL-2受容体値の上昇87.0%を示した。④皮膚病型別頻度は, 皮膚サルコイド結節型33.3%, 皮下型24.6%, 局面型19.3%と高頻度であった。結節性紅斑は1.8%と稀であった。⑤眼病変は皮膚サルコイド結節型, 局面型, 結節性紅斑様皮疹で, 肺野病変は皮膚サルコイド皮下型で高頻度にみられた。⑥皮膚病変の治療では, ミノサイクリン内服が65%(13/20例)に有効であった。

【考察】本邦でのサルコイドーシス皮膚病変は2004年疫学調査で35.4%に認められ, その診断に皮膚生検は重要な役割を果たしている。サルコイドーシスの可溶性IL-2受容体値上昇は胸郭病変ステージとの関連などが報告されている。今回の検討で, 皮膚病変を有する症例でもその上昇が高頻度に見られることが示唆された。皮膚病変の治療は, 一般にステロイド剤外用や局所注射が有効とされている。ミノサイクリン投与は, 皮膚科領域からの報告では有効とする報告が多いが, 一方で有効性はさほど高くないとする報告もあるため今後も検討が必要と考える。